

男の子四人の働く母ちゃんのつぶやき ～家族と仕事、抑えられない想いの狭間で～ (第4回)

子どもと仕事と自分自身。それぞれの第一歩。 (本当の自分が、自分の大切な事を選ぶまでのプロセス)

■女性研究者・女性技術者として生きるための行動

《 自分が幸せになりたくて始めた女性の働き方の調査 》

帰国の翌年2001年に三男誕生。1年と短期ではあったけれど在米経験から、自分がどのような生活をしたかと思っているかはわかっていたのですが、日本でそれを実現することはとても難しかった。それは、自分自身に問題があるように感じました。3人の子供達は、5、3、1歳になり、自我がハッキリしてきた上の二人との関わりは楽しくなると同時に、難しくなりました。一方、研究は、論文も書けず、業績不振は明らかでした。子供はかわいいけれど、子供を育てることが仕事をする上で、時間的にも精神的にも足かせになっていると感じていました。アメリカでは、あんなに愛しく思えた子供達なのに、家族との時間を楽しく過ごせたのに、なぜ？

きっと、方法があるはずだ。子育ての方法を扱う様々なサークルや講座を検討し、最終的に、「叱らず褒めずに、勇気づける子育て法」と紹介されていた、アドラー心理学に基づく親子関係プログラム“パセージ”に参加しました。隔週日曜日終日計4回2か月の講座は、“共同体”として、子どもと対等な関係を築くことの考え方の座学と、毎回の宿題であった、家庭での子どもとの関わり記録(逐語)をもとにしたオープンディスカッションから構成されていました。当時、私が一番困っていたのは3歳の次男の頑固さでした。延長サービスを利用して、19時閉園時間ぎりぎりにお迎えに駆け込むと、息子達はすでに、保育室ではなく、事務室で先生と一緒に遊んでいます。頭を下げて、子ども達を引き取ろうとするのに、子ども達は帰るのを嫌がり、隠れたり、逃げ回ったり。大げさでなく、背中に三男を背負い、長男の手を引いて、泣き叫ぶ次男を脇に抱えて、無理やり車に押し込んで帰宅するのです。ある時、この次男のお迎え問題を、親子関係プログラムのオープンディスカッションで相談したところ、参加者の一人が「お母さんと隠れんぼしたいんじゃないのかしら？」と。正直、「真面目に考えてくれているの?!」と怒りがこみ上げました。それでも他に手立てがなく、翌日、保育園で例によって隠れてしまった息子に「もういいかい」と呼びかけたら、なんと、「まーだだよー」と。衝撃的でした。遊びたかったのか?!ならそう言ってくれ!帰ってから遊ぼうじゃないか!!かくれんぼして見つけ出した次男と共に、子ども達が誰も泣かずに帰宅するのは、久しぶりのことでした。「対等な共同体」は、私たち親子の一つの答えでした。

子どものことは少しずつ理解が進む一方で、改善がみられないのは、研究(仕事)の方でした。時間が減った以上、アクティビティは落ちてしまう。これは受け入れるとして、少しでも改善する

ための方法はないのか、この精神的な苦しさから逃れる方法はないのか。そして、2003年に日本女性技術者フォーラムに入会します。その頃、F. Mary, Ph.D. Williams, Carolyn J. Emerson による“Becoming Leaders: A Practical Handbook for Women in Engineering, Science, and Technology”を読む勉強会である「ビカミングリーダー(BL)研究会」(JCCのプロジェクトのようなもの)が発足しました。この本は、自分自身のキャリア実現を考える人と組織の人材育成を考える人を対象に、重要な目標を達成するためのチェックリストや行動計画に活用できる情報を提供するハンドブックで、理工系の女性にとって特に重要なスキルについて解説されているものでした。渡りに船と、英語が苦手なことも忘れてメンバー募集に手を挙げました。

そして、2005年夏、この勉強会で翻訳した成果は、「実践 リーダーをめざすひとの仕事術」(新水社)として出版されました。本を学ぶこともとても大きな経験でしたが、この間、研究会のメンバーである女性技術者の方々と出会い、お話を伺い、仕事の仕方、考え方を聞いて多くの発見をしました。期間中、フォーラムの運営委員もさせていただいたのですが、関西でのイベントに、忙しいはずなのに東京から手伝いに来てくれる女性技術者の方々に触れ、これまで自分がいかに人のために働こうとしていなかったかを痛感しました。その女性の「一人ですより、みんなですの方がもっと素晴らしいことができる」という言葉にも驚きました。一匹狼でしか仕事をしたことがなかった当時の私は、「一人ですの方が、気楽で、いい仕事できるのでは」と思っていたのでした。

そんな学びの中で、私も少しずつ変化していったように思います。肩をいからせ、周囲に対して警戒態勢で頑張る一辺倒から、職場で数少ない女性教員とランチを食べに出かけては、たわいもないおしゃべりや思いを語り合ったりすることを楽しめるようになりました。

■機械工学オンリーから機械工学をバックグラウンドへ 《機械工学 研究一筋》

機械工学の領域に女性研究者は当時多くはありませんでした。私が博士課程で学んだ大学は、機械工学分野の日本国籍の博士号取得女性は私が第一号と聞いています。そういう時代背景もあったのだと思いますが、私はチャンスに恵まれていました。学会賞をもらったり、国費留学の機会を得たり。自分自身も、足りない能力を、熱意とそれにかける時間で補おうと精一杯努力していました。研究は楽しく、やりがいのあるものでした。

研究の最大の魅力は、「研究をしているときは嫌なことは全部忘れてしまえる」ということでした。心配なこと、気になること、人間関係などの難しいことなど、全く関係のない世界。それぞれが、研究という同じ目的でつながっていて、互いに敬意が払われている。研究議論においては、互いの示す事実だけを見て、相手が傷つくかしら、など考える必要なく、頭だけを使って議論していいところが最高に楽しかったのです。

国からの科学研究費補助金(科研費)も継続的に獲得していました。このことは、研究者としてのアクティビティの証の一つといえました。ですから、大学と違い、大学院生もいないし、授業は多いと環境は異なる高専に着任してからがむしゃらに研究し、科研費を継続的に獲得していました。自分自身の研究に喜びとやりがいを感じていました。

《 偽りの自分との決別 》

高専に着任して4年がたった頃(不惑の40歳)から、研究に対する自分のあり方に、次第に疑問を感じ始めました。会社を辞めて大学院に入学し研究を始めた当初(26歳)は研究が楽しくて

仕方がなく、ただ純粋に、自分が興味を持っている研究テーマを申請して科研費を獲得してきました。それなのに、結婚して子どもが生まれ、高専に移っての10年弱の間に、研究のドライブが違うものになっていました。「科研費を獲得しなければ自分(の研究)を評価できなく」なっている自分になっていました。純粋に研究テーマを考えるのではなく、研究費獲得を目標としたテーマ設定をしようとする自分に気が付いたのでした。

家では小さな子供たち、布おむつや洗濯物、汚れた食器の山との格闘が待っています。これまで、研究以外何もせずにきた私でした。家事は、喜びも達成感も感じない、全く無駄で嫌な作業でしかありませんでした。毎日が必死で、子供たちと楽しい時を笑顔で過ごすなどという雑誌にあるような暮らしとは程遠い日常でした。加えて、子供が生まれても仕事のアクティビティを下げたくないとなれば、子供といっても気持ちは半分別のところにあつたというのは否めませんでした。憧れの物理学者である米沢富美子さんの女性研究者として母としてのエッセイを読んでは、能力も、日常も、何もかもに大きなギャップを感じて、それでも、落ち込むな、頑張るのだと走る努力をする私がいました。

空回りする努力と疲弊する自分のふがいなさに嘆く中、ますます、自分の研究の評価が気になり始めます。自分自身は納得できる研究ができていないことはわかっている。それが表立って業績に出てしまっているだろうか。着眼点や発想でなんとか補えているという風になっているだろうか。内容よりも評価が気になり始めたのです。そんな自分も嫌でした。自分の研究を人に評価されるのはともかくとして、研究の方針さえも、評価を基準に決めようとしている自分を強く侮蔑しました。誰とも知らない審査員に自分の研究を、そして、自分自身の価値を決めてもらうことを受け入れている自分。それは、自分で自分の研究を生きていることになるのか？そもそも研究とは私にとって何なんだ？自分はいったい、本当は何がしたいんだ？

自分が大学時代に、経験者としての有利さを期待して卓球部に入ったのと同じことを自分がしていることはわかっていました。今の自分に自信がなくて、過去の栄光にすがって、なんとか、これまでの研究の遺産で乗り切ってしまうか。そう思っていると認めざるを得ない、でも、どうしていいかわからない。そういう動けない気持ちでじっとしている感じでした。

過去の栄光と遺産に決別することはたやすいことではありませんでした。こんな気持ちで研究をしたくない、本当にしたいことを見つめてみよう。

そう思ってみても、「もし、科研費がもらえなかったら？」「中谷さんももう終わり」「負け組」「やっぱり、中谷さんは中谷敬子個人ではなく、『中谷君の奥さん』なんだね」。様々な言葉を自分で自分にぶつけました。研究仲間にももう恥ずかしくて会えない。友も失望するだろう、友を失うことになる。そんなことを考えたりもしました。機械工学のテーマで次年度のための科研費の申請書を書こうとしても書くことができず、追い詰められていきました。

そんな混沌とした気持ちを抱えながらのある日、子供の習い事が終わるのを待っていた時、『その時』はやってきました。私の内面でのグズグズという限界の時です。ちょうど三男の誕生日でした。衝動に突き動かされるように、ATMで引き出した3万円を握りしめ、近くの紀伊國屋書店に飛び込みました。今まで行ったこともなかった「人文社会」だったかの棚に行き、買えるだけ本を買いました。社会心理学、メタ理論、キャリアの実



践例をまとめた訳本、、、。吟味するという感じじゃなくて、やたらめたらに、響く感じのものを買いまくりました。

そして、1週間後の〆切日。連日徹夜で書き上げた科研費申請書は、女性技術者・研究者のキャリア支援がテーマでした。2010年のことでした。研究内容に関する4枚にわたる説明欄には、今まで、機械工学の分野で、自分自身が仕事をしながら生きるということに試行錯誤して来た一女性研究者として、家庭と仕事を両立する努力をする中で感じたこと、気づいたこと、必要なことを、半ば訴えるようにして書き上げました。研究業績欄を埋めてみて、自分が10年近く前から女性研究者支援活動をしていたことにも気づき、このテーマへの自分の思いを知りました。

自分の想いをすべてぶつけ切ったと思いました。申請書を提出した帰り道、もう後戻りできない将来への不安に足が震えながらも、これで落ちても悔いはないと、自分に言い聞かせたことを覚えています。

結果、想いをぶつけたキャリア開発・支援の研究テーマでの研究補助金を、奇跡的に獲得することができました。このことは、事実上の専門替えを意味しました。研究の領域では、「研究の幅を広げても軸足をふらつかせるな」と言われます。私は、研究の軸足を、今までの機械工学から、学問的に全く知識のない「キャリア開発・キャリア教育」に移したのです。